

5 〈黒い蝶〉

お日さまとお月さまは、あんまりおあいになることがありませんでした。

それは、お日さまは人びとに光と労働をあたえるお仕事を、お月さまは、休息とねむりをあたえるお仕事をというふうに、べつべつにお仕事をしていらっしやったからです。

けれど、ときたま、お日さまが西の空にしずんでいかれようとするとき、お月さまが東の空にすがたをあらわされることがありました。

10 そういうとき、お日さまとお月さまは、なつかしように、いろいろのできごとを話しあわれるのでした。

その日の夕ぐれが、そういう日でした。

大きな波のようにうねってつづいているおかの上は、いちめん青あおしたムギ畑でした。

15 ところどころに、ぞうき林が島のようにうかび、うすむらさきのもやが、ただよっていました。

「わたしは、とてもかわいい子にいました。

お日さまがいました。

「わたしもきのうの夕ぐれ、かわいい子にいました。

お月さまも、おっしやいました。

20 「どつちがかわいいでしょう。まあ、わたしの話を聞いてください。」

お日さまは、きらきら光る朱色の糸をくりだしながら、話しはじめました。

「けさでした。明けがたでした。わたしは、まだ、だれも通らない、ごみごみした町をのぞきました。なぜなら、この町は、工場に行くので、早く起きる人たちが住んでいたからです。すると、

しーんとした道に、ひとりの男の子が、ゆかいそうに口ぶえをふきながら歩いているのです。

25 むねには、白いうさをだいていました。

この子は、せまいところに、十人もきょうだいがいて、ぶつかりあいながらくらしている家の子でした。けれど、路地には、ニワトリをかったり、ウサギをかったり、そうそう、ハツカネズミもいましたっけ。じつにゆかいにくらしているのです。

—どうしたんだね、こんなに早く。

30 わたしが声をかけると、その子は、まんまるいかおをわたしのほうに向けて、ウサギをだきあげながら、

—ぼく、きのう夜なかにおねしょしちゃったんだ。

—やれやれ、それで見つからないうちに、にげだしてきたのかい？

35 —ううん、見つかるのはすぐとうちゃんに見つかってしまったんだ。とうちゃんが、うんとおこつて、朝までねないで立ってろつてへやからおいだされちゃったの。かあちゃんが、はいんなくていったけど、ぼくだって男だから、ねなかつたんだい。

—かわいそうに、寒かつたらう？

—うん、それでね、夜なかにごはんをたいて、みそしるつくって、鳥小屋行ってたまごとしてきて、たまごやきして、今食べてきたところなんだよ。これからシロをつれて、さんぼだい。

40 その子は、目をくるくるさせて、元気よくいました。」

お日さまは、おかしそうにいました。

「まったくゆかいな子じゃありませんか。」
すると、お月さまが話しはじめました。

5 「わたしが見たのは、やっと学校にはいったぐらいの子でした。おかあさんは、ワカメの行商をしているまじしい人でしたが、あねむすめが病気になったので、その日は、すえの子をつれて、町のだんなしゆうのところへ、金をかりに行ったのでした。

なれないおざしきで、あせをびっしりかきながら、ながいこと話したので、おかあさんは、いつもより、かえってつかれてしまったのでしよう。村の入り口のいじどうさまのところまでくると、へたへたと、草の上にすわってしまったのです。手をひいていたその子に、

―ちっとやすも。

10 といつて、ほっと、息をつきました。

たのみにいった金をこたわられたので、家に帰る元気もなくなってしまったのでした。足をさすり、かたで息をしていたおかあさんは、いつのまにか、うとうとしたようでした。

15 すると、おじどうさまに、石をつみあげてあそんでいた子が、ちよこちよこと、おかあさんのひざにあがると、小さな指で、おっぱいのあたりをつつきはじめました。ねむっているおかあさんの顔を、右からのぞいたり、左からのぞいたり、むねをあけておっぱいをだそうかな、どうしようかなと、考えているようすが、あんまりかわいいので、わたしは声をかけました。

―おや、ぼうやは、学校なん年生？ それでもおっぱいがこいしいの？

20 その子はわたしを見あげると、はずかしそうに、おかあさんのむねに顔をつつこんでしまいました。だが、そーつとのぞくと、

―だって、たった一年生だもん。

といいました。

―たった一年生？

わたしは、思わず、くすりとわらってしまいました。

―おっぱいつつくといい気持ち？

25 ーうん。口んなかがいい気持ちだ。

すると、その声で、うとうとしていたおかあさんが、目をあげました。そして、わたしに気がつくくと、

―あれ見な、のんのさまだぞ。

30 とひぎの上の子をゆすりながら、歌いはじめました。

のんのさま いくつ

十三 七つ

まだ年やわかいな

35

すると、その子も歌います。

のんのさま いくつ

十三 七つ

……………

40

わたしは、その母と子の、わたしを見あげて歌うすがたが、目にのこつてなりません。

お月さまは、ほの白い顔をかたむけて、話し終わりました。お日さまもいつか、しんみりと、「まったく子どもはかわいい。どの子もほんとかわいい。勝負なしですね。」

といいながら、金色のかがやきをのこして、しずんでいかれたのでした。お月さまも、ほほえみながら、ごあいさつをなさって、空にのぼっていかれたのでした。

それから―。

ずいぶん長いこと、お日さまとお月さまは、お話をなさるひまもなく、せわしくしていらっしやいました。

10 ところが、ある日。

お月さまが山のかげからのぞくと、お日さまが、ぎらぎら光りながら、しずもうとせず、お月さまをまつていらっしやるではありませんか。

「どうなさいました。」

お月さまは、いそいで、声をかけました。

お日さまはまつかにもえ、雲の色どりもただならぬありさまだったのです。

「わたしは、きょう、はらがたつてならないのです。」

おひさまは、はげしいいかりで、声がふるえていました。

20 「あの山を見てください。あの山に、今、ひとりの子が死んで横たわっているのです。しかし、その子の村では、まだ、そのことを知りません。それなのに、わたしはしずんでいかなくはないのです。」

「なぜです。どうして、その子は死んだのです。」

お月さまは、せきこんでたずねました。

25 「あの山は、大むかしから、あの村の人たちにとって、なくてはならない山だったので。まきをと、炭をやき、春にはワラビを、秋にはきのこを、そして、あまいカキやクリがどっさりみりました。草かりもできたし、冬はウサギがりました。ところが、どうでしょう。見てください。あそこを。」

お日さまは、ぎらぎらする光の矢を、さつとその山に向けました。お月さまは、のびあがつて―らんになるなり、みるみる青ざめました。

30 ぶきみなたいほうが黒い口を天に向けてならば、どんなみにくい虫よりもみにくい戦車が、動いていました。カーキ色の兵舎が見えます。鉄じょうもうが光っています。そして、美しい山はだはひきむかれたようにいたいたしく、赤土がむきだされていました。

そして、村の人たちが、たんせいこめてつくった畑の上を、見知らぬ国の兵隊たちがてっぽうを持って、ずしずし歩きまわっているではありませんか―。

「どうしたのです。なにをしようとしているのです。」

お月さまがさげびました。

35 「戦争のくんれんをするのだというのです。あなたもごぞんじでしょう。お百しようさんたちが、どんなに、自分たちの土地を愛しているかを、なん百年ものむかしから、ひとくれの土もいたわってたがやしてきた土地が、ふみにじられ、弾丸の通り道になり、そして山の入り口には、「立入禁止」と書かれた立てふだが、つめたく立てられていのです。」

お日さまは、しばらく、ことばをきってだまりました。そして、つらそうに話しはじめました。

40

「その子は、ひとりで山をのぼって行きました。

―あぶないよ、ぼうや。

わたしは、声をかけました。

―だいじょうぶ。きょうは、えんしゅう、休みだって。

その子は、高い声でさけびました。

―なにしに行くんだい？

―だんがんのはへん拾いに行くんだよ。くず鉄屋に売るんだ。とうちゃん、かあちゃんに、ないしょでためて、びつくりさせてやるんだい。

その子は、ひさしぶりに山にはいったからでしょう。うれしそうに、木の葉にとびついたり、小鳥をおどかしてみたりしながら、歩いていきました。弾丸にうたれて、ほうきのような木の下あたりになると、その子は目をみはってはへんをさがし、見つかるとう声をあげてよろこぶのです。すると、とつぜん、その子が立ちどまり、そーっと、麦わらシャツポをぬぎました。一びきのチョウを見つけたのです。黒いチョウでした。あたりいちめんのがやく緑のなかを、ひらひらととぶ大きな黒いチョウは、ふしぎな美しさでした。(絵本は ひらひら、ひらひら、)

その子は追いかけはじめました。ひらひら、なかなかつかまりません。もう、ずいぶん山のふかいです。そして、いつのまにか、わたしもさそいこまれて、木の葉のあいだから、ぴよいぴよいと、その子といっしょに追いかけて行きました。

ところが、ぴたりとやんでいたいほうが、いっせいにうちだされて―。

お日さまは、声をのみ、うなだれました。

お月さまも、声をのみました。

「その子は死んだのです。

青い草の上に横たわったその子のあたりを、黒いチョウは、いつまでも、ひらひらまわっていました。

わたしは、その子から、目をはなすことができませんでした。生きていてはくれないだろうか、手でも動かしてはくれないかと、気がくるいそうでした。

やがて、黒いチョウは、その子のむねにとまり、ぴたりと、はねをとじました。

悲しいしるしのように―。

その子の父親も母親もいそがしくて、その子のことを、まだ、心配していません。まだ小さいその子が、うちのくらしを助けるために、はへんを拾いに行ったとは、だれも思っていないのです。けれど、もし、知ったら―。

お月さまは、なみだを流していいました。

「わたしが、その子のそばにいてやりましょう。青い美しい光を、その子に、ひとばんじゅうふりそそいでやりましょう。もし村の人たちがさがしに出たら、どんな小さな道も明るくてらしみましょう。」

お日さまは、こみあげてくるおえつをこらえながらうなずくと、さいごのかがやきを、その山になげかけ、がっくりしずんでいきました。

そして、お月さまは、やさしい白い顔をきびしくひきしめて、だんだんふかくなっていく夕やみのなかを、しずかに、しずかに、のぼっていかれたのでした。